

Letters of the

SHELLEY COLLECTION

Number 5 February 1991

The Bunkyo University Koshigaya Library

T.S.Eliot の最初期の作品に「いんぎんな会話」*Conversation Galante* と題する一篇がある。1909年、ハーヴァード大学在学中の21歳のときに書かれたのだが、その第1節はこうである。

わたしが言うのに、〈おセンチなお友だち、
お月さま！
でなけりやおそらく（途方もないことを言
い出したものだが）
プレスター・ジョンのバルーンかも知れま
せんね
それともお高く吊されたべちゃんこの古提
灯で
あわれな旅人を照らしては途方に暮れさせ
る〉
彼女はすると、〈何て脱線なさるんで
しょう！〉

若い男と年上の婦人との、擬似恋愛的な会話のやり取りの場面である。George Williamson その他によれば、Jules Laforgue の決定的な影響の下に書かれたと言われるが、その詩篇から約半世紀後の、1956年に行われたエリオットの講演「批評の境界線」を見ると、単にそれだけではないように思われてくる。彼は〈説明なしで理解される〉詩の例として、シェイクスピアの『嵐』からエアリエルの歌を引用し、それに並べてシェリーの「月に寄せ

エリオットの
シェリー評価

星野
徹

る」*To the Moon* から最初の2行を引用する。

あなたが青ざめているのは疲れたためか
天を攀じながら、下界を見つめながら

そして彼は、〈いま引用したシェイクスピアやシェリーの抒情詩のような詩がわたしによく分ると思うことが、錯覚でない最大の理由は、今日読み返してみても50年前に変らぬ鋭

い戦慄を与えてくれるからだ」と語る。

〈50年前〉とは、「いんぎんな会話」の制作の時期にほぼ符合する。またその詩篇から23年後、講演からは24年前の、1932年～33年に母校ハーヴァード大学で行われた連続講演『詩の効用と批評の効用』、その第1章の注「詩における趣味の発達について」では、14歳から22歳にかけて、フィッツジェラルド訳『オーマー・カイヤム』、バイロン、キーツと共にシェリーを耽読したことが語られている。となると、「いんぎんな会話」は「月に寄せる」に対する或る反応の意識から発想されたのではなかったか、と思えてくる。つまりパロディとして書き起されたのではなからうか。シェリーが月を、その〈貞操にふさわしい伴侶〉を見出せないでさまよう〈高貴な生れ〉の婦人にたとえるのに対して、エリオットは逆に相手の婦人を〈おセンチなお月さま〉に、さらに月との類推で〈(アド)バルーン〉に、〈古提灯〉にたとえている。ここには耽読のあげくの反撥、そこから月への感情移入に対する忌避、つまりは青年期特有の、またおそらくはピューリタニズムに固有の潔癖さからくる反作用が見て取れるだろう。『詩の効用と批評の効用』第5章でのシェリー論は、正しくその延長線上にあらわれたものだと言ってよい。〈シェリーの観念は常に思春期の観念であるように思える〉、〈彼は18世紀の合理主義者になるのと同時に、しかも同じように熱烈に、朦朧たるプラトン主義者になることができた〉、〈シェリーの詩の濫用はワーズワスのそれよりもわたしを傷つける〉と舌鋒鋭く批判する。だが、24年後の「批評の境界線」では、青年期の潔癖さをそのまま拡大したような、むしろ荒野の決闘紛いの批判は完全に影をひそめてしまうばかりか、〈詩篇を詩として〉読める理想的な例として、「月に寄せる」を賞揚している趣きさえある。エリオットの批評態度に大きな変化が生じたことだけは確かである。

じっさい、その講演より6年前の1950年の講演「ダンテがわたしに示唆するもの」、この3度目のダンテ論では、シェリーに最大級の讃辞をすでに捧げてさえいたのだ。彼は「リトル・ギディング」*Little Gidding* 第2章で、ロンドンの空爆後の朝の情景をうたっているが、ダンテの「地獄篇」との対応をいかにして言語化すべきか苦慮したようだ。ダンテの詩型テルツァ・リーマを英語で実践することの困難さから、〈ブランク・ヴァースで男性終止と女性終止とを交互に用いる〉詩型を、彼自身では考案したのだが、にも拘らずテルツァ・リーマを用いて「地獄篇」をほうふつとさせる〈19世紀の詩が一篇ある。「人生の勝利」*The Triumph of Life*である〉と言って、スベツィア湾でのシェリーの溺死によって中断された544行の長篇詩から、J.J.ルソーの出現する箇所176行～205行を引用しながら考察を加える。「人生の勝利」は、世俗の亡者群の凱旋行進に対するシェリー流のcontemptus mundi、その激越この上ない吐露であったと思うが、エリオットが引用したところから仮りに182行～190行を、原詩で引用すれば、

That what I thought was an old root which
grew

To strange distortion out of the hill side,
Was indeed one of those deluded crew,

And that the grass, which methought hung
so wide

And white, was but his thin discoloured
hair,

And that the holes he vainly sought to hide,

Were or had been eyes:—'If thou canst,
forbear

To join the dance, which I had well forborne!
Said the grim feature (of my thought
aware).

一本の古い根と見えたもの／奇妙な形にね
じれて山腹から生え出たあれは、／実にあ
の惑わされた仲間のひとりだった、／また
いちめんに白く垂れていると見えた／草は、
彼の薄い色褪せた髪にすぎなかった、／ま
た彼がむなしくも隠そうとした穴は、／眼
であり眼であったものだ、—くもしおまえ
にできるなら、／堪えてこの舞踏に加わる
な、わたしも加わらねばよかったのだ！
／と不気味な顔が言った（わたしの思惑を
察知して）。

けだし英語のテルツァ・リーマの典型であ
るに違いない。この部分の1行目～7行目は、
『詩の効用と批評の効用』でも引用されて、
〈それ以前の長篇詩よりもうまく書けている
だけでなく、知恵も増している〉と述べなが
らも、〈シェリーの詩篇の中の観念を無視し
てその詩だけを享受できようか〉と否定的判
断を付け加えることを忘れなかった。それ
に対してこんどは、〈ダンテの詩的想像力に生
れつき近いものを持ち、ダンテの詩に浸っ
たので……彼の精神は、最も偉大な最もダ
ンテ的な英語の詩篇を書こうとあるい立っ
た〉、〈これだけうまくはわたしに書けない。
わたしはダンテに対する英語の最高の讃辞の
ひとつとして引用するのである。それは、ひ
とりの偉大なイギリス詩人のスタイルと魂と
の両方に対して、ダンテが与えた影響を証明
してくれるからである〉と絶讃するに到る。
このようなエリオットのシェリー評価の変
化は、ミルトン評価のそれと規を一にする
もので、逆の評価の変化はダンテについて見
られる。これは、1927年のイギリスへの帰
化、およびユニテリアンから国教会への回
心という実人生上の転機を何ほどかの契機
としながら、その後の詩作体験を含むさま
ざまな経験の累積的な、つまり深化と拡大
の結果であったろうと考える以外にない。

(12月25日受理)
茨城大学教授

「雲雀」の レジェンド／石原武

ここに不思議な詩を紹介しよう。アメリカ
の薄倖なモダニスト、ケネス・パッチェンの
第三詩集『獅子の齒』から的一篇である。

ケネス・パッチェンを、20世紀のシェリー
だと呼んだ批評家（CIグリックバーグ）が
いた。かれによると、パッチェンが、シェリ
ーと違うのは、「この時代の感じ易い少年が、
急進的な政治状況にあって、深刻な変化を経
験した」ということだという。事実、かれの
詩は出発から〈怒り〉にみちていた。ヘンリ
ー・ミラーは書いている。「ニューヨークで
初めて会ったとき、こいつは〈抗議〉の生
きた見本みたいな男だな。まるで誠実すぎる
暗殺者だ……手を握ったとき、おれはそう思
ったな。こ奴、自分の手でこの世の暴君やサ
ディストを一人残らず殺すつもりだな。おれ
たちの真中で爆発しそうにせわしい息を吐
いている人間爆弾だ。それでいて優しいんだ
な。あの鼻息の荒いドラゴンの中味は気の
優しい王子さんだぜ……優しい魂ってのは、
過敏な肌を守るつもりで、火のマントをか
ぶりがる。」(Kenneth Patchen - a collection of essays
by Richard Morgan. AMS 1976)

亡霊たちが怒りの天幕を不潔にする

「はくらにとってそれが生活だ」

そういえば、シェリーも〈怒って生まれて
きた〉詩人であった。アンドレ・モロワが